

# 塩谷温と『支那文学概論講話』について

前川 晶

## 一 序

塩谷温『支那文学概論講話（支那文学概論）』とそれを巡る若干の問題について陳述したい。まず主要参考書目を列挙しておく。塩谷に関する記述は主として当人の回顧録『天馬行空』（日本加除出版 一九五六）に依拠した。その他には年譜・著作目録を含む雑誌『東京支那学報第九号／故塩谷節山先生を偲ぶ』（東京支那学会 一九六三）、『斯文第三六号／節山塩谷温先生追悼号』（斯文会 一九六三）、『東洋文化「第九号」／塩谷温先生追悼号』（東洋文化振興会 一九六三）、及び江上波夫編『東洋学の系譜・第二集』（大修館書店 一九九四）収録の評伝、藤井省三「塩谷温」を主に参照した。塩谷の活躍した主要舞台のひとつ、東京大学の研究環境については『東京大学百年史／部局史一』（東京大学百年史編集委員会 一九八六）に収められた文学部の該当項目——特に中国哲学（五〇二頁以下）、東洋史学（六二四頁以下）、中国語中国文学（七二六頁以下）——に拠った。戦前「支那学」については戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点」（『理想』三九七号／理想社 一九六六年六月）の他、「支那学」が制度的に確立した明治末―大正期より数えて百年の昨今に発表されている幾多の論考、たとえば野村浩一『近代日本の中国認識——アジアへの航跡』（研

文出版 一九八一）、山根幸夫『大正時代における日本と中国のあいだ』（研文出版 一九九八）、あるいは『日本中国学会五十年史』（日本中国学会 一九九八）などの先攻を活用したが、紙幅の都合から、引用して論ずるには及ばなかった。なおやむを得ぬこととはいえ、以下においては「支那」の語を無造作に用いている。この責任は筆者の甘受すべきところである。また以下における引用文は、原則として全て新字表記にあらため、原文のルビはカッコに括って適宜転記した。

### 一一 塩谷温について

塩谷温（一八七八〜一九六二）、号は節山。その祖父箕山の兄宕陰（一八〇九〜一八六七）は言うまでもなく天保改革期から幕末にかけての高名な儒学者であり、温は宕陰、宕陰の弟・箕山、箕山の子・青山に続く詩礼伝家の四世にあたる。以下略歴を記せば、学習院卒業後明治二九年（一八九六）に第一高等学校いわゆる一高入学。三五年（一九〇二）に東京帝国大学文科漢学科卒業。その後大学院へ入り支那文学研究に従事、学習院教授を経て三九年（一九〇六）東京帝国大学文科大学の講師、ついで助教に就任。そのままドイツ、ついで清国へ留学して大正元年（一九一三）帰朝。同九年（一九二〇）に博士論文を提出して文学博士号を獲得、同年東京帝国大学教授として支那哲学支那文学第二講座担任となり、以後支那文学科の教授として活動を続けた後、昭和一四年（一九三九）に退官、東京帝国大学名誉教授の称を授与された。晩年は東方文化学院や湯島聖堂の経営に参画、昭和三七年（一九六二）に八四歳で逝去した。

斯界においては塩谷の名は、画期的業績を残した研究者として記憶されて然るべき価値を持つている。東京大学においては「中国文学の研究教育がようやくその実を備えるに至ったのは、塩谷温に始まる」とさえ称せられる塩谷は、近世俗文学の研究環境を深く分け入って整備した人間であり、その研究史上の功労は日本人研究者においては京都大

学の青木正児（一八八七—一九六四）、吉川幸次郎（一九〇四—一九八〇）といった学者と並ぶものだ。しかし同時に、現時点における塩谷の知名度は、おそらく専門家中においてでさえ——たとえば今挙げた青木や吉川のように一般的にもある程度知られた研究者に比べれば——明らかに低い。このように塩谷が事実上忘却された直接的理由のひとつは、おそらく彼自身の業績が形成途上における戦前支那学研究の基礎的作業に終始していることによる。

塩谷の代表的業績は、具体的には三つにまとめることができる。第一が明末の「三言二拍」そして「全相三国志平話」、いずれも失われていたテクストの発掘と評価。第二が中国関係翻訳の本格的な叢書であり研究書としてもなお価値を失わぬ「国訳漢文大成」諸訳の担当。すなわち大正九年（一九二〇）から一二年（一九二三）にかけて刊行の志怪伝奇『晋唐小説』、及び通俗小説『剪燈新話』・『剪燈余話』・『宣和遺事』、そして戯曲『琵琶記』・『桃花扇』・『長生殿』<sup>(3)</sup> 翻訳である。発掘と翻訳——以上をまとめていえば、要するに塩谷の業績とはいずれにしても支那学というジャンルそのものに奉仕する性質のものであり、支那学の〈文化資本〉蓄積——社会学者ブルデューの用語／通常は経済資本、〈モノ〉とはみなされない、資本としての性格が隠蔽された文化的財産総体／〈象徴資本〉とも呼ぶ——に直にかかわるものだ。従って彼の功績は結果としてフィールド全体に還元されてしまう側面が大きく、かつ世間の通例からみてもこの手の作業に従事する者は個人名を後世に遺す機会には恵まれにくいと想像できよう。では個人性の強い翻訳作業についてはどうか？。昭和に入って縮刷版も作られた「国訳漢文大成」は、現在でも古書店の目録や国立図書館の所蔵にみえることが少なくない。明らかに一定以上の流通量を持った、良い意味で〈稀覯本〉にとどまらない全集本であり、そのうちことに読者量の少なくなかったとも思しい「文学部」二〇冊の、さらに半分を占める小説戯曲の、かなりの部分を塩谷は一手に引き受けている。<sup>(4)</sup> ゆえにその名が相応に記憶されていた可能性が高い。しかし現時点においては、俗語文さえも全文書き下しによって、「訳」した当叢書は、それ自身がすでに〈古典〉であって、いまや一般読者はおろか専門家でさえも、読みやすく近しい書籍であるとは言い難い。

以上の点で、個人的イメージの強い専刊をいくつも持つ諸人に比すれば、あからさまに言つて塩谷は損をしているともいえよう。その塩谷温の個性が最も色濃く刻印されたほとんど唯一の研究著作であり、テキスト再発掘と翻訳作業とに並ぶ第三の業績、しかし時期的にはその両功績に先んじて当時の斯界に温自身の名を高からしめたのが、以下で取り上げる『支那文学概論講話』もしくは『支那文学概論』なのである。

### 一―二 『支那文学概論講話』または『支那文学概論』について

議論の前に刊本の簡単な整理をしておく。以下で扱う書籍には主に二通りのバージョン——すなわち大正八年（一九一九）五月に大日本雄弁会から刊行された『支那文学概論講話』と、戦後昭和二十一年（一九四六）六月以後に弘道館から発行された『支那文学概論』上・下二冊があり、後者は前者の改訂版にあたる。<sup>(5)</sup>いま改訂の目に付く点を上げれば、例えば（です・ます）体で書かれていた旧版の文体を（である）体に改訂。また旧版において上編第四章・下編第二章を合わせて六章となっていたものを、新版では旧版上編第一章「音韻」のあとに「文字」の第二章を設け、さらに下編第五章「戯曲」を前四章に加えて上冊六章の編成とし、序文も新しく書き下ろした。内容については特に戯曲小説の両章を補填、ことに小説については、自身の発見した「三言・二拍」「全相平話」、及び他の新資料に関する記述を加えるなど、ともあれ新版の増補改訂はその随所に及んでおり、従つていづれを取るかで若干話が違つてくることになる。以下においては『概論講話』の方が初刊であること、また参照しやすい現行本が存在する——講談社学術文庫で現行の『中国文学概論』（一九八三）は前者『支那文学概論講話』バージョンに拠る——という事情にも鑑みて、基本的に『概論講話』（以下この略称を用いる）に拠りつつ綴ることとしたい。

## 二 『支那文学概論講話』について

まずその序文を見よう。

支那は文学の古国なり。四千年の歴史を有し、四百余州の地に跨がり、人口の多き実に四億万と号す。泰華巍巍として千秋に聳え、江河洋々として万古に流る。天地の正氣ここに鐘（あつま）りて三代の文化夙に開け、漢唐の世、儒道を尊崇し文教を奨励せしかば、済済たる多士、翰苑に翱翔し風月に吟詠して、詩賦文章の英華を發揮し、元明以降、戯曲小説の勃興するに及びて、国民文学に不朽の傑作出で、なかんずく漢文・唐詩・宋詞・元曲を推して空前絶後となす。何ぞその盛んなるや。實際作家の数、篇什の量、はた年代の久遠、種類の豊富なる点において、世界の文学にその比を見ず。試みに支那新聞を閲読せば、誰かその文字の国たるに驚かざるものあらん。これを要するに支那文学史は縦に文学の発達変遷を講述するものにして、支那文学概論は横に文学の性質種類を説明せんとするものなり。

昨夏東京文化大学に第一回夏季公開講演の開かるるや、余は薦に膺（あた）りて支那文学概論を演述せり。雄弁会主野間君と余と旧あり、その筆記を刷印に付せんと請う。……ここにおいて修正増補すること一年有半、要は主として戯曲小説の発展を叙述し、もつて我が支那文学界の欠陥を補わんと欲するにあり。よつて前後詳略を異にするに至りたれば分ちて上下二篇となす。

当序の日付は大正七年（一九一八）二月二三日。「雄弁会主野間君」とはすなわち後の講談社初代社長野間清治（二八七八―一九三八）。明治四二年（一九〇九）年に野間によつて創立された大日本雄弁会（大日本雄弁会講談社）こそは、いうまでもなく現講談社の前身である。<sup>6)</sup>

文中の「第一回夏季公開講演」が開かれたのは序文前年の大正六年（一九一七）。大正元年（一九一二）帰朝後より

塩谷は種々の戯曲及び小説の授業——いま『東京支那学報』所載「塩谷節山先生講義題目（東京大学）」により細目を挙げると、各年九月から翌年七月までの講義において「支那戯曲講義」「支那小説講義」と題して『西廂記』（大正二—三年）、『琵琶記』（同三—五年）、『還魂記』（同五—六年）、『元曲（漢宮秋、梧桐雨）』（同六—七年）、そして『読本今古奇観』（同六—七年）を講じ、また唐を区切りとしての「支那文学史概説」と題する講義その他をも平行して開講している。かくして『概論講話』が出版された大正八年（一九一九）頃の塩谷について、倉石武四郎（一八九七—一九七五）は次のように記している。

大正八年の四月、ちょうど東京大学に在籍していたわたくしが、先生のおすすめによつて、佐原の伊能家（夫人節子の実家：引用者注）へうかがつた。……その晩はじめて、いま学位論文を執筆しているので、清書をしてつだつてほしい、ということをあかさされた。こうして、おてつだいにうかがつていっているうちに、原稿がまとまり、「元曲研究」として東大に提出されたのが、先生の学位論文である。

それは、全部がいわゆる漢文でかかれていて、一半が元曲の歴史、一半が元曲選の解題、それに、元曲目録がそえられていた。先生は、中国留学中、特に長沙に滞在し、葉德輝先生について、曲学の底蘊をたたかれた。王国維先生の曲学に関する諸研究、特に「宋元戯曲史」「曲録」などが公刊されたのは、先生が中国留学から帰朝される前後のことであつた。先生の論文は、当然にも、「宋元戯曲史」「曲録」の影響を多分にうけており、その内容のおもな部分は、先生の「支那文学概論講話」に、平易な叙述によつて公表されている。

元来、「支那文学概論」は、先生が首創された講義で、中国留学にさきだつドイツ留学中に、そのヒントをえ、ないしは骨格をつくられたものようであり、東大の公開講座でもこれを講述された。それを、かつて先生の講席に待した野間清治氏が講談社から出版したのであるが、後半の戯曲小説の部分は、出版の際、特にくわしく敷衍されたため、前半とはちがった体裁をとっている。わたくしが先生から新刊第一本の「支那文学概論講話」を

いただいたのは、ちょうど佐原の伊能家でおつたいをしていたときのことである。<sup>(8)</sup>

以上に塩谷の戯曲研究の経緯と学位取得、そして『概論講話』発刊前後の概略が述べられているが、このうち清国留学については後述する。以上に加えて、ここで小野忍(一九〇六—一九八〇)が『概論講話』について述べていることを参照しておきたい。

前にあげた二つの御著書「支那文学概論講話」と「支那文学概論」に現われた限りでは、先生は滞独中主としてドイツのシノローグの学問を学ばれたようである。なかでもガベレンツの「中国語文法」(一八八一年)とグルーベの『中国文学史』(一九〇二年)から感得されるところが多かつたのではないか。「支那文学概論講話」は、構成において森槐南の『作詩法講話』と共通したところがあり、これを骨子としたものと一般にみなされていよう。私もそれに異論はないが、冒頭に「支那語の特質」という一節が設けられているのは『作詩法講話』に見られぬ特色で、ここではドイツ仕込みの、当時の日本の漢学界にあつてはきわめて新鮮だつたであろう学説が披露されている。冒頭にこの一節を設けた構成は、私の推測では、グルーベの「中国文学史」を参考にしているように見える。グルーベのこの本は、第一章「序論。文学との関連における言語と文字」に始まり、第十一章「戯曲と小説。結語」に終わる。冒頭で言語と文字を説いたのは、著者の一つの見識で、この本より一年早く発表されたジャイルズの「中国文学史」では、この問題についてはふれられていない。

……グルーベのは、前述の序章と終章の中間に、第二章「孔子と古典(四書五経)」、第三章「孔子以前および孔子時代の文献。儒教と哲学的逆流(先秦諸子)」、第四章「老子と道教」、第五章「詩の復興——屈原と『楚辞』」、第六章「漢代——古典の再生。歴史編纂。哲学と詩」、第七章「漢朝の崩壊から唐朝の支配まで」、第八章「宋代——抒情詩の黄金時代」、第九章「宋代とその近世中国への影響」のような章を設け、叙述において均衡がとれているばかりでなく、文学とともに思想の流れを追求していることもすぐれた特色の一つである。……

塩谷先生はドイツから帰国されてのち、「語学より小説に進み、詞曲の学を葉徳輝先生に受け」られたわけであるが、そうした先生の学風の形成にもドイツのシノロジー、とりわけグルーベのそれが大きく作用したように思われる。<sup>9)</sup>

森槐南こと森泰二郎（一八六三—一九二一）の『作詩法講話』（文会堂 一九二一）は、森逝去の同年に口述講演の遺稿を採録編集して発刊されたものである。内容は六章仕立「第一章 平仄の原理／第二章 古詩の音節／第三章 唐韻の区劃／第四章 詩、詞の別／第五章 詞、曲並に雜劇、伝奇／第六章 小説概要」より成る。本書は、題名の通り作「詩」——むろん漢詩——の方法を漢詩人の森槐南が説いたものであつて、この点では文学概説書とは若干性質を異にする。その漢詩の話が雜劇伝奇に、さらには小説にまで展開するという点が興味深いのだが、そのことには後で触れるとして、森のこの概説の目録は『概論講話』の構成「第一章 音韻／第二章 文体／第三章 詩式／第四章 楽府及び填詩／第五章 戯曲／第六章 小説」——詳しくは次章冒頭に挙げるものを参照——と確かに似ているといえないこともない。だが森がいう「平仄音韻」とはあくまでも漢詩<sup>10)</sup>漢文学の平仄音韻であり「支那語」四声音韻ではない。つまり言語学的関心とは似て異なるのであり、小野がグルーベのほうにこそ『概論講話』との近似性を指摘したというのは、この点について『作詩法講話』を挙げるより適切といえよう。この小野の指摘を切り口にして論議の出発点を作っておきたい。

小野はある意味で『概論講話』の特徴をその構成により深く立ち入つて考えている。これは恐らくは塩谷の発想の肝要な箇所に触れているのではないかと思う。というのも序文にいう「これを要するに支那文学史は縦に文学の発達変遷を講述するものにして、支那文学概論は横に文学の性質種類を説明せんとするものなり」と述べるあたりをみれば、塩谷は明らかに、対象をいかなる形で語るかについてこそ、より大きな関心を意識して集中しているからである。「性質種類」<sup>11)</sup>通史を構成するオブジェクトをいかに配置すべきか。今必要なことは何よりもそのような配置の仕方



であり、構成であるという認識が、塩谷の「縦―横」という物言いに伺われるのではないか。ここにおいて小野の指摘する「言語と文字」を塩谷が冒頭に持つてきたような行為もまた、言語や文字について語ることに加えて、その配置の仕方自体にも意味があると考えてもよいのではないか——以上のような出発点に立つて『概論講話』の配置の仕方、すなわち目次構成を見ていくこととしたい。

## 二一 『支那文学概論講話』の構成

以下が『概論講話』の目次である。典拠は初刊本による。なお紙幅の都合上、原書の表記は改行部分に一重、ないしは二重スラッシュを入れ、細目は括弧に括るなど適宜改めた。

### 上篇

第一章 音韻／第一節 支那語の特質／第一項 孤立語／第二項 単音語／／第二節 四声及び百六韻／第一項 四声／第二項 百六韻

第二章 文体／／第一節 総説／／第二節 辭賦類／第一項 楚辭／第二項 賦／／第三節 駢正文

第三章 詩式／／第一節 総説／／第二節 古体／第一項 四言古詩／第二項 五言古詩／第三項 七言古詩／

／第三節 近体／第一項 律詩／第二項 五言絶句／第三項 七言絶句

第四章 楽府及び填詩／／第一節 楽府／／第二節 絶句の歌法／／第三節 填詩

### 下篇

第五章 戯曲／／第一節 叙説／／第二節 唐宋の古劇／第一項 唐の歌舞戯（大面―撥頭―踏謡娘―蘇中郎―窟

窟子―參軍戯）／第二項 宋の雜劇（鼓子詞）／／第三節 金の雜劇（搦彈子 連廂詞）／／第四節 元の北曲

／第一項 北曲の作者（北曲の作者―填詞料―元曲選と古今雜劇）／第二項 北曲の体製（二本四折―一折一調一韻

—楔子—一人独唱—題目—/第三項 漢宮秋と西廂記(漢宮秋 西廂記 原本西廂記—南曲西廂記—北曲西廂記—第六才子書—西廂記の対訳) / /第五節 明の南曲/第一項 南曲の作者(南曲の源流—六十種曲と荊・劉・拜・殺—南曲の作者)/第二項 南曲の体製(音韻上の相違—旋律上の相違—体製上の相違—脚色上の相違) /第三項 琵琶記と還魂記(琵琶記 牡丹亭還魂記)

第六章 小説 / /第一節 神話伝説(楚辞天文篇—山海経—崑崙山—西王母) / /第二節 両漢六朝小説 / 第一項 漢代小説(小説の起源—神異経—海内十州記—漢武故事—漢武内伝—別国洞冥記—飛燕外伝—雜事秘辛—吳越春秋—越絶書) / 第二項 六朝小説(拾遺記—搜神記—搜神後記—異苑—続齊諧記—述異記—還魂志等) / /第三節 唐代小説 / 第一項 別伝(海山記—迷樓記—開河記—李衛公別伝—虬髯客伝—李林甫外伝—東城老父伝—高力士伝—梅妃伝—長恨歌伝—太真外伝) / 第二項 劍俠(紅線伝—劉無双伝—劍俠伝(聶隱娘・崑崙奴)) / 第三項 艶情(霍小玉伝—李娃伝—章台柳伝—会真記—游仙窟) / 第四項 神怪(柳毅伝—杜子春伝—南柯記—枕中記—非烟伝—離魂記等) / /第四節 譚詞小説 / 第一項 譚詞小説の起原(宣和遺事—京本通俗小説) / 第二項 四大奇書(水滸伝—三國志演義—西遊記—金瓶梅) / 第三項 紅樓夢(紅樓夢の縁起—紅樓夢の結構—紅樓夢の主旨—紅樓夢の作者—紅樓夢の影写—紅樓夢亡国論)

ここで比較のために、煩雑を承知で塩谷の先輩格に当たる二冊の日本人著『支那文学史』の目録を挙げておきたい。ひとつは古城貞吉(坦堂、一八六六—一九四九)『支那文学史』。もう一冊は、戯曲小説の概説書として極めて早期の『支那戯曲文学小史』を著した笹川種郎(臨風、一八七〇—一九四九)が、『小史』について発表した『支那文学史』である。のちに倉石武四郎がジャイルズ(Giles, Herbert Allen/一八四五一—一九三三)の『支那文学史』(A History of Chinese Literature/一九〇一)よりも早いとして例に挙げたこの両冊——ジャイルズは「序文に『この書物こそは世界のあらゆる国語を通じて最も早く作られた支那文学史である』と、いと誇らかに述べている」と倉石はいう——は、

早期であると同時に、現在我々の考えるような中国文学の教科書としての体裁と、比較的近似した構成や内容を備えており、この点で『概論講話』の先行文献として異同を参照するのに適當であろうと思われるからである。

二——一 参照① 古城貞吉『支那文学史』

古城貞吉『支那文学史』。明治三〇年（一八九七）刊、その後三九年（一九〇六）までに五版を重ね、途中若干の増補がある。煩雑を避けて第六編までの細目「一節」単位項目を省略する。

序論

第壹編 支那文学の起源／／第壹章 総論／第二章 書契の起源及び文字の構成／第三章 唐虞三代の沿革及び開化沓斑／第四章 周代の学制／第五章 諸子時代以前の文学

第貳編 諸子時代／／第壹章 総論／第貳章 儒家（第壹節 孔子及び五経／第貳節 孔門の弟子／第参節 孟軻荀卿及び其の著書）／第三章 道教（第壹節 老子及び其の書／第貳節 列禦寇、莊周及び其の書）／第四章 墨家／第

五章 法家／第六章 名家／第七章 兵家／第八章 雑家／第九章 賦家

第三編 漢代の文学／／第壹章 総論／第貳章 議論牀の文／第三章 叙事牀の文／第四章 詔勅、上書、及び書牘牀の文／第五章 漢代の韻文

第四編 六朝の文学／／第壹章 総論／第貳章 六朝の韻文／第三章 六朝の散文／第四章 六朝詞人伝  
第五編 唐朝の文学／／第壹章 総論／第貳章 唐朝の儒学／第三章 唐朝の詩／第四章 唐朝の散文／第五

章 唐朝の仏教文学

第六編 宋朝の文学／／第壹章 総論／第貳章 宋朝の儒学／第三章 宋朝の散文／第四章 宋朝の詩

第七編 金元間の文学／／第壹章 総論／第二章 金朝の文学者（第壹節 元好問以前の作家／第二節 元好問、及

び其詩文／第三章 元代の文学（趙孟頫と其の詩例 虞集の小伝 作例 楊載、范梈、及び揭傒斯と其詩例 馬祖常、薩都刺、及び其作例 儒学家諸人 楊維禎の小伝、及び其詩）

第八編 明代の文学／第壹章 総論／第二章 明代の散文（第壹節 古文辭／第貳節 經義即ち八股文）／第三章 明代の詩（第壹節 国初の諸人及其詩／第貳節 永楽以後の詩）

第九編 清朝の文学／第壹章 総論／第貳章 清朝の古文学家／第三章 清朝の詩家余論／古代文字の説、篆隸の変遷 造字の基礎 文字と學術との關係 儒教主義の發展 陋儒と立言 儒教主義と小説との關係 元曲の發達 士君子の小説觀

## 二——二 参照② 笹川種郎『支那文学史』

次に笹川種郎『支那文学史』明治三十一年（二八九八）刊。同人著の『支那戯曲小説小史』は、題目としては「第一章 概説／第二章『紅樓夢』／第三章金聖歎／第四章李笠翁／第五章『桃花扇』／附録『金雲翹伝』梗概」と内容こそさ・さ・かながら『支那文学史』の前年明治三〇年（二八九七）に早くも出版された。以下煩雑を避け第三—六期間の細目を省略する。

総説／支那の文明。支那の人情。南北両人種の差異。拜自然の習俗。家長制度の發達。生存競争の激烈。自尊自大の風。支那文学の特質。支那の文字。時代の区分。

第一期 春秋以前の文学／総説（三皇。五帝。）／一、書（書の由来。今文尚書。古文尚書。尚書の価値。其文辭。）／二、詩（詩の起源。詩の変遷。詩の六義。訓詁。支那の詩。詩の句。）／三、易（易の由来。連山帰蔵周易。易の性質。其文辭。）

第二期 春秋戦国時代の文学／総説（周の末。春秋戦国時代の概観。当時の思想界。）／一、孔子と老子（孔子の伝。

其教義。論語。老子の伝。老子の書。其教義。其文辞。／＼二、孟子と莊子（孟子の伝。孟子の書。其文辞。莊子の伝。莊子の書。其教義。其文辞。）／＼三、屈原（賦。本伝。其作。其性質。其文辞。）／＼四、韓非子（荀卿。韓非の伝。其書。其文辞。）

第三期 兩漢文学／＼第四期 魏晉及南北朝の文学／＼第五期 唐朝文学／＼第六期 宋朝文学

第七期 金元の文学／＼総説（遼の文学。金の文学。元の文学。）／＼一、元遺山（金の文士。其伝。其詩。遺山以後の元詩人。）／＼二、小説と戯曲の発展（小説戯曲發達遲々の所因。支那小説戯曲の特質。其起源及發達。水滸伝。三国志。雜劇。西廂記。琵琶記。）

第八期 明朝文学／＼総説（八股文。明儒。明の文章。明詩。）／＼一、高青邱（劉基。青邱の伝。其詩。其他の詩家。）／＼二、李何七子と李王七子（永樂以後。李東陽。李夢陽。何景明。李攀龍。王世貞。其他の諸子。明末。）／＼三、小説と戯曲（西遊記。金瓶梅。湯若士。）

第九期 清朝文学／＼総説（清朝の学風。考証学。性理学。現時の清。）／＼一、詩人と文章家（侯方域。魏僖。汪琬。廖柴舟。錢牧齋。吳梅村。南施北宋。王漁洋。朱竹垞。その他の文士。）／＼二、小説と戯曲及其批評（紅樓夢。李笠翁。桃花扇。金聖歎。）

### 三 『支那文学概論講話』の意味

#### 三― 文学、そして『詩経』と『楚辞』の位置

以上から見て取れる性質を、要所において主に三点に整理する。

第一。①②が、現今であれば中国史学、中国哲学研究に分類されるべき要素を大量に含んで（未分化）であること。このことを考えるために、当時における大学制度自体のあり方を補助線として引いてみよう。話を単純化するた

めにサンプルを東京大学に限るが、言うまでもなく大本は江戸幕府の昌平坂学問所、幕末の開成所、医学所に始まった諸教育機関が、明治政府に受け継がれてそれぞれ昌平学校、開成学校と医学校となり、若干の変遷興廃を経て東京大学となったのが明治一〇年（一八七七）。当初は法・理・文・医四学部体制の中、文学部において当初和漢文学科、のちに漢学科として出発した学科は、以後現在に至るまで幾多の変遷を経ていくのだけれど、その中で最も大きい改組のひとつは、今からほぼ百年前の明治三十七年（一九〇四）文科大学学科規程改正により、従来の九学科が哲学・史学・文学三学科へ統廃合されたことにより、漢学科の中国史学ジャンルが史学科に吸収され、その（残り）が「支那文学科」と「支那哲学科」とに分立した改編である。<sup>(12)</sup>

すなわち①②が初刊の時点では、組織化された研究者集団としての大学制度上においては、「漢学」があっても「支那文学」に対応する実体がなかった。ゆえにこの限りでは「支那文学」と「支那文学者」には、いわば社会制度上の保証が存在しなかった。このような環境下（文学）のボーダーがどこにあるのかは、いわば（研究者）にとつてさえ不明確だったのであり、結果、①や②は名は「文学」とはいいいながらも、内情は中国に関する知的資本蓄積を未分節なまま積算統合した、文哲史全ての知識に関わる教科書としての「支那文学史」——この場合の「文学」は明らかに literature と同じく（書かれたものの総体）という最も古典的なニュアンスをも一方に帯びていよう——に近い形で、前近代的な性質を色濃く残したまま現れたのである。①②が冒頭に博物学めいた叙述を備えている点（例えば古城の「序論」の細目は「支那国民 支那文字の性質 四圍の境遇と文学との關係 政躰及び儒教主義の影響 王家と文学 支那の文学者 概結 から成る）も如上の事情の中で解することが可能であろう。

しかし①や②が現れた時期自体は、ジャンルの急速な分化を伴いながら、中国に関する知的資本蓄積がなされつつあった時期でもあった——注三に挙げた諸叢書の蓄積は年代を見て明らかのように明治末年に始まる——。ないしはそもそも①や②それ自体がそのような動きの中で現れたのだともいえよう。このような蓄積を踏まえた上で、『概論

講話』は（文学）だけの話に絞って議論を展開することが可能だったといつてよい。①②から『概論講話』が出てくるまでのこの二〇年ほどの期間には、以上のような側面において支那（文学）研究者にとつての大きな環境変化が生じていたのである。そしてこの変化の中で①②↓『概論講話』間において話題が取捨選択を経ていることは、目次を見れば一目瞭然であり、加えていえば、現在の我々の「中国文学（に分類されるべき話題）」に関する「常識」からいつて、『概論講話』の題目には極端に目立つ過不足——特に（過）——がないとみてよい。

第二に、『詩経』と『楚辞』の位置の問題がある。『概論講話』は「歴史学」や「哲学研究」に所属する書物と、それ以外の「文学」に所属するテキストとの分離独立を明確に行っている。そこにおいては最早、『史記』『漢書』や四書五経、道学考証学といった話題は、文学研究の見地から必要な範囲に限つてのみ叙述され、ないしはテキストそのものが範疇から除外されるのであつて、①や②のように冒頭や随所に大部のページを割くといつたことはしない。ただしことに思想、哲学として除外されるべき典籍である経書中に一冊だけこの限定、ないしは分割を免れたテキストがあつた。すなわち『詩経』である。

これを要するに『楚辞』は詩の六義においては賦の体に属しておりますが、比興の義によつて譬喩を設け、善鳥香草をもつて忠貞の徳に配し、惡禽臭物をもつて讒佞の行いに比し、美人を以て君に譬え、また多く神話伝説を引いて材料としてあります。故にその想像に富み譬喩に巧みにして、しかも局面の大なるは、到底『詩経』三百篇の、いたずらに規矩を重んじ、溫柔敦厚の一点張りなるの比ではなく、幽遠の想、詭異の辞、雄大の篇、詩としては遙かに北方古詩の上にあります。……

その後宋玉景差の徒みなよく辞賦を作り、その博・膽麗をほしいままにしました。しかれどもただ屈原の従容辞令を学んでついに肝心な諷諭の義を失つてしまいました。例えば屈原の美人を賦するはもつて君に喩えたのでありますが、宋玉の高唐賦・神女賦・登徒子好色賦のごとくに至つては、筆を極めて美人そのものを描写するこ

とに努め、ついに司馬相如の美人賦や、曹子建の洛神賦などの端を開くようになりました。されば『楚辞』は後世の恋愛文学や、神仙小説の濫觴であると申してよろしいのであります。<sup>(13)</sup>

この『概論講話』の一節は、現今語られる「中国文学の起源」の語り方の基本を、ほぼ的確に備えている。それは以下の三段階から構成される。第一、文学として読むことは可能ながら、「溫柔敦厚」儒学の徳性を備えて本来はあくまで経書であるところの『詩経』と、「幽遠」「詭異」美的特質を備えて華麗な文字を意識的に点綴したものである『楚辞』との間に線を引く。第二、南北文化の相対という形を取って詩騷両者比較を行う。第三、『楚辞』に文学特性上幾分かの重点を置きながら「中国文学の起源」を語るといふかたちで語り出す。

ただし以上の、特に第二項目のような南北文化比較という形式自体は、実は①②の段階で既に出現しているものあり(例えば②「総説」の細目「南北両人種の差異」)、より正確に言えば我々の語りだしの中に、今なお文学史形成の黎明期の枠組みが、このような形で残存しているといつてもよいのだが、ここで肝心なことが一つある。すなわちこのような語り出しは、①②のような文・哲・史の整理されていない段階では、必ずしも有効に活用されえない、ということである。これはそもそも、語り全体の構成を〔文・哲・史の未分化Ⅱ先(文学)史時代〕↓〔分化Ⅱ中国文学(史)の発生〕という形に整理できてこそ、初めて意味ある導入部であつて、つまりオブジェクトを取捨選択し、かつ有機的に機能するように並び替える作業が事前に必要なのである。以上を象徴的に表現するなら、①②の目録に見える「詩」と「屈原」との、いわば視覚的距離(笹川で言えば「第一期／二」と「第二期／三」との距離)がいかに縮まるかが、文学的特性をいかにうまく取り扱い、それを表現しえているかのメルクマールたりうるのであり、この点で①や②はせつかくの着想を必ずしも十分には活用できていないといわねばならない。

第三が俗文学、戯曲と小説の問題である。これについては項をあらためる。



## 三二 俗文学——戯曲と小説——の問題

近代文学概念の流入する以前には、文字書籍をフェイティッシュなまでに尊ぶ漢学的価値観や、その価値観を奉じる東アジア知識人層の目から見て、戯曲と小説は俗文学が、一応はそれとても文字の綴られた著作典籍であるにもかかわらず、社会的に「著作」扱いきれない軽侮の対象でしかなかった——俗文学をめぐってのこの歴史的背景は、今更くどく述べるまでもなく良く知られたことである。ここでは

ここに注意して置くが、然らば支那人は此れ等の小説・戯曲を軽蔑して、全く之れを読まざるやと云うに決して然らず。支那人は表裏ある人間なり。表には士君子の読むべからざるものとして、口に排斥しながら、裏面においては殆んど之れを愛読せざるものなし。『紅樓夢』に「誰でも紅樓夢を読むという人は無けれど、誰でも之れを読まざるはなし」との意味の語あり。之れに徴しても知るべし。支那文学には一方厳格なる経学の反動として、此れ等の俗文学あり。此れを愛読する者は随分多けれども、読者自身は娯楽の為に読むものにして文学として価値づけて此れを読むものは殆んどなし。<sup>(14)</sup>

という狩野直喜（君山、一八六八—一九四七）の指摘を挙げて、屋下に一点の注意を喚起しておくこととしたい。狩野の口の悪さはさておいて、彼の以上の叙述は、娯楽作品としての俗文学が現実生活においてはどのように処理されていたのかを、簡潔かつ的確に指摘していると思う。誰もが娯楽として享受していながら、享受していないかのようなふりをする。この構造こそが現実の大量消費とは逆に、俗文学の社会的立場を一方で低価値のままに固定しつづけてきたのである。故に問題はこの構造そのものにどう対応するかにある。

ちなみにこの狩野こそは——次に引く倉石の記述冒頭にも見えるが——、留学直前に彼を訪問した塩谷へ、戯曲を学んでこないかと注意を直接喚起した人間であったともいわれているが、そのことの重みはともあれ、肝心の塩谷の反応を以下で概観したい。

## 三二二一 俗文学にかかわる一般の問題

ここで二つの逸話を挙げる。前者は倉石武四郎の回想、後者は塩谷自身の回顧である。

先生が元曲に封し、このような熱意をそそがれたのは、なぜであろうか。記憶にあやまりがなければ、京都大学の狩野君山先生のすすめであるという。狩野先生は、京都大学の文学部がひらかれてから、退職まで、一貫して元曲を毎週一時間ずつ、講読しておられた。東大でも、はやく森槐南先生が元曲の講義を担当されたことがある。しかし、戯曲研究を終生の事業とし、これによって学位を請求されたのは、先生にははじまるといってよい。それだけに、これに対するかざあたりも相当なものがあつたとおもわれる。

これは、先生から直接うかがつたことである——先生が中国の留学から帰朝されてまもなく、当時東大で中国語を担当していた金井保三先生が、先生の私宅を訪問された。……そこへ突然の来客があつた。それは、ほかならぬ当時の東大の主任教授星野恒先生であつた。老先生の突然の来訪には、さすがの先生も、いたく狼狽された。といって、ひろからぬ私宅のこと、別に席をもうけることもできず、西廂記の版本が、ところせましとならべられたへやに、老先生をご案内するほかはなかつた。そのとき、老先生は、おもむろに、「あなたは、せつかく支那に留学されながら、唐宋八家の文をまなぶことなくこのような書物をよまれていたとは……」と、いましめられたという。当時における戯曲研究の困難は、資料の不足もさることながら、このようなかざあたりこそ、もっともはげしい困難であつたのではないか。先生は、創始者としての苦勞、いまでは問題にもならない苦勞を、ひとつひとつ経験してこられたのである。<sup>(15)</sup>

星野豊城先生、諱は恒（ひさし）、……。私が支那文学研究の官命により、留学中に支那文学の未開拓地として戯曲小説の研究をして帰朝し、大学の講壇に立つて、新生面を開こうとしたところ、「伝家の業を襲（つ）がず、唐宋八家を捨てて金聖歎に走るとは何事です」と大目玉を頂戴した。長沙で王先謙先生からも同様のこ意

見を承わつたこともあつたが、老儒先生から見れば戯曲小説の如きは文学とは認められなかつたのである。漢学料であつた時代は、唐宋八家文や、唐詩選で事足りていたのであるが、苟くも支那文学講座として英文学、独文学と対抗せんとするには、シエキスピーヤ、ゲーテ、シルレル以上のものを以てしなくてはならず、是に由つて旧態依然の漢文学ではすまされず、漢文、唐詩、宋詞、元曲より明朝の小説まで一通り支那文学を概観した所以であつた。<sup>(16)</sup>

以上、間接直接に伝わってくる塩谷の口吻には、この叱責が若干心に引つかつたまま後年まで残つたらしいと見て取ることも出来ようか。<sup>(17)</sup>ともあれ当「老儒先生」こと星野恒（豊城、一八三九—一九一七）は塩谷岩陰の高弟（養子に望まれたとさえ伝えられる）たる「儒者」ではあるが——従つて彼の叱責には一般論というより何よりも、塩谷家伝来の面目を思わぬか——という個人的感情も含まれていよう——、最終的に久米邦武（一八三九—一九三二）、那珂通世（一八五二—一九〇八）などと並ぶ実証主義史学者の先駆となつた大学者であり、この点ではおおよそ守旧固陋の「老儒」どころではない。「サテ世評ハ前述ノ如ク、事実ノ本原ナル書籍ノ性質、伝説ノ虚質ニ頓着セス、徒ニ忠臣義士ノ消滅ヲ恐れ、或ハ勸懲ノ意旨ニ背クト云ヒ、或ハ研究ヲ廃セヨト云フハ、皆其偏見謬解タルヲ覚ユ<sup>(18)</sup>」と激烈に論じて、歴史の教訓と修身道德との区別をしない閉鎖性を真つ向から退けた星野は、「老儒先生」の側というよりはむしろ「新生面」側の人なのである。参考までに逸話を紹介しておく、明治三八年（一九〇五）から大正六年（一九一七）の間、東大支那文学第一講座を担任した星野は、同僚で第二講座を担当した市村瓊次郎（器堂、一八六四—一九四七、講座担当は明治三八年（一九〇五）—大正七年（一九一八））が「天莫空句踐」の読みを教科書で定める際に、「莫」を「ナシ」ではなく「ナカレ」と読むべしと主張して我意を通じたことについて「アーメンだと酷評」つまり信仰、思ひこみに過ぎないと嘲つたという。<sup>(19)</sup>「アーメン」は倫理と学問とを切り離して考えていた、この点おおよそ元漢学者らしからぬ星野は、ただ塩谷が反応した（文学）にまるで無関心なだけであつた——つまるところ「新生面」と美的観

念への無関心無感覺とは、おそらく両立しえたのであつて、塩谷の星野批判は、明らかに近代人文学の教養主義が確立したあとからのものであるということには、若干の注意を払つておく必要があるだろう。

とはいつても〈文学〉開拓に関する限りは旧漢学的な星野の態度が、あちこちで塩谷の足を引つ張つたであろうことは——注7にも記したように——間違いない。まして当時の〈漢学科〉においては、書かれたもの一般ともいふべき、いわば大文字的〈文学〉なる觀念は存在しても、〈美〉の觀念に対応する芸術としての文学觀念は、制度上の実質においては確立していないし、それ以前に〈支那学〉という枠組み自体不明確だったのである。先に述べたとおり東大の「漢学」が「支那学」に転じ、文・哲・史に三分されたのは塩谷帰朝の八年前たる明治三十七年（一九〇四）。彼が帰朝して「支那文学概論」と「支那戯曲購読」の講座を開いたのが大正元年（一九一二）——星野が塩谷を叱咤したのはこの時点か——、その星野が当初国語学・国文学・国史学科を担当（明治二十六年（一八九三）以降）してのち、三分改編の三年前の明治三十四年（一九〇一）において今度は支那哲学・史学・文学講座の担当に任命されたということを見れば、制度上の改編は当座は人材の転用を前提としての、いわば器が先立つてのものであったのである。加えて例えば塩谷が学んだ漢学科の第二講座講師、もと秋田藩出仕の老儒・根本通明（羽嶽、一八二二—一九〇六、講師として明治二八年（一八九五）—二九年（一八九六）の講義はといえば「御講義は易経で一貫し、……漢学科は経史文の三班に小分され、例えば月曜の第一制限の時間表に、経班には支那哲学史、史班には支那法制史、文班には支那文学史とあつても、同時間に根本先生が易を講ぜられれば、経班の学生は之を哲学史として、史班は法制史として、又文班は之を文学史として聴講致すのである」<sup>(20)</sup>といったものであつたという。つまり現実の個人は、制度の境を文字通り越境して動いていたのだし、そしてこの越境は文哲史区分だけのことでなく、星野の担任に見られるように、漢学総体と国文との関係においても似たようなものだったのである。

## 三二二—二 古城、笹川と『概論講話』との微妙な相違

## 三二二—二—一 『概論講話』の内実

「新生面の開拓」は以上〈文学〉とそうでないものとの間のこの種の曖昧さをいかに打破するかにかかっていた。すなわち古城『支那文学史』に序した井上哲治郎（一八五五—一九四四）は、その序において「支那文学を研究するにあらざれば、我邦古来の典故は如何にして討尋するを得ん」と述べつつも——これでは個体としての「支那文学」を専攻する理由にならない——、そのあとに

唯だ此點より考察する而已にて、支那文学研究の必要は十分に認識すべき余地あること復た疑を容れず、然れども尚お近く吾人に接する処より考察するに、吾人が日常思想を交換する機関たる文章は絶えて漢文に本づく処なきか、其文字は本と何人の発明に係るか、若し漢文を排斥せば普通の文章さえも綴り難かるべく、若し漢字を廃せば自己の姓名さえも記し得ざるべし、否、支那人を卑下する其論さえも支那人の恩恵によるにあらざれば為すこと能わざるにあらざや、果して然らば如何に支那を輕侮するとも、支那文学の研究は到底廢するを得ず、又廢するを要せざるなり、  
 といひ、さらに加えて

暇令い国字を尙変して支那文学の支配を免るるとあるも、支那文学は之れが為めに其價值を失うものにあらず、此事たる、希臘、羅馬、希伯粒、珊悉詔利多等の文学が千古不磨の價值を有すると何を以て異ならんや、殊に猶太人は西洋諸国にありては幾ど穢多の如くに輕侮せらるるも、希伯粒の研究が終りを告ぐべき時機を予想するを得ざるなり、<sup>(21)</sup>

と記している。東大文学部をリード、言文一致政策推進にも手を貸し、そして最終的に天皇制イデオログとして

も〔活躍〕した彼のこの記述は、よく知られるように漢字漢文を「日本語」から切り離せとも主張した井上が、他方〔中国〕としても〔文学〕としても独立した単位としての〔中国文学〕がいかなる意味を持つかについて——それがいかなる立場からであるかはさておくも——さすがに適切な認識を備えていたといえよう。<sup>(22)</sup>

ところで古城と笹川には見かけ上大きな相違がある。つまり目録を見る限り、一応は編章中に俗文学の記述を既に織り込み済みの笹川に比べ、古城のそれは余論で触れているに過ぎないかのようにも見える点である。しかし実はこれは、例えば明治三五年九月付の再版例言に「唐宋の仏教文学・金元間の詞曲小説等(23)に関しては、猶未た其消息を悉さざるもの多し、現に多少の材料を有し、又聊所見なきにあらざるも、今版に於ては未た此に及ぶと能わず、姑らく之を異日に譲れり。／明清の文学に於ては、頗る省略に従いしもの多し、此等の闕を補うには、将さに別に支那近世文学史を出さんと欲し、現に属稿中に在れば、他日江湖に間うの機あるべし」と述べているのを見ても分かるように、古城が慎重な態度をとったことに拠っているこの点で古城は、壁にぶつからずに書いてしまった笹川よりも、より厳格な態度でことに当たっていたといつてもよいのだが、ここで肝心なことを今更ながら確認しておきたい。戯曲小説に注目したということ、それ自体は明治三〇年においてすでに塩谷の専売特許ではない。塩谷の前には彼ら古城と笹川がいた。それ以前にそもそも塩谷には森槐南、狩野直喜という偉大な先学が既に存在していたのである。

そもそも往時において『文学概論』はどのように見られていたのだろうか。青木正児はその『支那文学概説』（一九三五）の第二章「文学叙説」において、「選讀書目」としてまず古城『支那文学史』、次に久保得二（天随、一八七五—一九三四）撰『支那文学史』（一九〇三）を挙げた上で、第三に『概論講話』を挙げ、「戯曲小説記述が主体となつて居り、それも全般に亘つて居らず、此の一冊で支那文学の外観が尽くせると思つたら失望するであろうが、名を捨てて実を取らば有益な書である」（傍点引用者）と、奇妙な物言いの評を付している。

青木のこの婉曲な言い回しを手がかりに、教科書、学習の道具としての『文学概論』に「失望」しかねない点があ

るならそれはいったい何かについて少し考えてみよう。考えうることの第一は、青木が明確に述べているように、この書が戯曲小説の記述にあまりにも偏っていること（後二章は容量的には前四章全体に匹敵する）。もう一つ考えられることは、この本が「支那文学史」として必要な体裁に欠けているのではないかということである。というのも「然れども一代の文学の風氣を知らしめんとするに於ては悉く文例を省略する能わず。乃ち能うべき範圍に於て之を收拾して在り」と笹川が述べるように（『支那文学史』序文）、明治—大正期の支那文学史にはたいいてい、本文の記述に加え、対象のテキストの引用を若干量付しているものが多い。現今の我々には、いわゆる（概説書）というよりはむしろ翻訳紹介、でなければ論文でもあるかのような、いささか奇妙にしか見えない当時の『支那文学史』の書法上の（混同）——現今の我々においてはテキストの紹介・翻訳とテキストの考究・解説、つまり語られるものと語るものとはむしろ位置を変えて明白に区分されるのが普通だ——は、まず参照の便を考えてのことでもあろうし、加えて当時においては近代出版文化下において、参照しやすい参考書たりうる翻訳書等が、これらの教科書が作られた明治三〇年前後には、まださして積算されていないといった事情も考えられよう。ともあれ『概論講話』は、おそらく当時において必要と考えられていた支那文学（概説書）の体裁をあまり満たしていない。この本は「教科書」にとつて必要な外観上の要素が明らかに不足している。

### 三—二—二—三 『概論講話』の意味

しかし『概論講話』の真骨頂は記述の量的多少よりも、その構成においてこそ存する。それを古城や笹川の構成の仕方において確認しよう。確かにそこには、俗文学に関する話題が一応は盛り込まれている、ないしは盛り込まれるはずだった。ここまではよいのだが、そこにおいて彼らは、旧来的な「支那文学」の認識にそのまま戯曲小説を織り込むのでなければ、補論余論として添付し、あるいは別冊仕立てにしなければならぬ。つまり以上においては、

「経あり、史あり、詩あり、賦あり、古文辞あり、小説戯曲あり、篇短なりと雖も尽く之を網羅せざるを得ず」（笹川『支那文学史』自序）のような、經史子と俗文学とを一線上に並べる列挙が、不可能であつたからこそ従来の苦勞があつたという事実を、彼らは明らかに忘れてゐる。

文学史というなら近現代以前の中国とてむろん「文学史」をもつてゐた。笹川よりは比較的慎重であつた古城の目次構成は、むしろそのような従来前の感覺によりつつ整理したものと見ることも可能であろう。この点で「聊所見なきにあらざるも、今版に於ては未だ此に及ぶと能わず」とストレートに保留した古城は、自らの限界を確かによく知つてゐた。

とはいへ古城自身はそのことを「現に多少の材料を有し」てはいるけれども「猶未だ其消息を悉さざるもの多し」つまり量的な理由に基づく限界だと考えてゐたと思う。だがこれはむしろ質的限界、構造上の問題だつたと考えるべきなのだ。いつたい道学や考証学をも語るべきオブジェクトとして中に含むような叙述が、まさにそれら道学や考証学によつてこそ排除されてきた俗文学と共存して、ひとつの目的、方向に沿つた歴史を構成したりできるものだろうか？。それができるくらいなら「誰でも紅樓夢を読むという人は無けれど、誰でも之れを読まざるはなし」とはならない。（紅樓夢）の抑圧は、漢文学正統派の「文学史」のネガとして、必然的に強いられたものなのだ。そのような（正統派）文学史と対応するのが先述来の、未分化な（文学）概念であることはいうまでもない。そしてこの（文学）の未分化未整理の側面は、ここ戯曲小説においてこそ、避けようのない問題点として立ちふさがつたのである。

ここにおいて我々ははじめて『概論講話』が冒頭に音韻を含む言語の問題を、そしてその後文体／詩式／楽府／戯曲／小説、すなわち塩谷のいう「文学の性質種類」から構成される「支那文学概論」の、その構成の意味を考へることができると思う。塩谷と古城、笹川との微妙な、しかし決定的な違いは、「戯曲小説」の書法が、経、史、詩、賦、古文辞と同列の「性質種類」＝文体であり、それは四六から古文へ移行したというのと同じ、文体の変化である



ということを示したかどうかの点にある。いうまでもなく戯曲小説の貶められる大きな要因は、内容その他もさることながら、何よりもその「白話文」という文体の問題にこそある。そしてこの文体という側面において（漢学者）たちは「加之修辞学夙に開け韻文に散文に、その体裁極めて多し。文選は三十七類に分ち、就中韻文は支那文学の粹なり。抑三百篇變じて屈宋の辞賦となり、漢魏の古詩となり、樂府となり、唐の近体となり、宋の詞となり、元の北曲となり、明の南曲となり、清の戯曲となり、降りて現代の白話文学となる。何ぞその盛なるや」<sup>(24)</sup>などとは、少なくとも「三百篇」と「曲」が単線的に直結されうるなどとは——ありえぬとまではいえないが<sup>(25)</sup>——普通はまず考えなかつたのである。以上を粗雑に総括するなら、漢文学の問題をその構造にまで分け入つて考えるのでない限り、「三百篇」と「曲」とは、基本的には価値上（何より文体上も）その次元を全く異にして存在しつづけるほかない。この次元の相違する両者を（文体）という点で同じ土俵に引きずり出し、（漢文）としては違ふものでも（支那語）においては共にみな（支那文学）を構成するのだということ——『概論講話』の目録仕立ては、このことを目で見えるかたちで端的に示したのである。

### 三——二——三 「支那文学史」の倒錯

この点で興味深いのは、古城や笹川においては、明らかに小説戯曲が尊いという結論が先に受容されていたことである。西洋文学百年、二百年の歴史を、その順番も分別も何もなしに一気に吸収する羽目になった彼らの環境においては、小説戯曲の文学の尊さは、その尊いという結論こそが先に受容されていた（むろんこのことは実際に読んだときの彼ら自身の実感とはまた別のことと考える必要がある）。この結果彼らは結論を不動の前提として、事後に現実の著作の形態を決めざるをえない。これゆえに俗文学の話題はあるいは留保され、あるいは無理矢理に行間に注入補填されざるをえなかつたのである。「支那文学史」の内実はある種この因果関係転倒の産物以外のなにもでもなかつ

た。この倒錯の分かり易い例を、他ならぬ森槐南『作詩法講話』に見ることが出来る。『作詩法講話』の話題が詩に始まつて小説にまで話題が及んでいく拈張解釈について、森は次のように説明する。

元来支那に於きましての小説と申すものは、儒学と申すものゝ興りまして以来は、何処までも排斥せられた傾きを有つて居りますのでありまして、小説を読むなどと申すものと、興りまして以来は、何処までも排斥せられたものであつたのでございます、之れはヤハリ儒学と申すものが最も盛んに起りましてより以来の風習でありまして、夫れより以前に於きましては此の小説と申すものは、ヤハリ学者の必ず一覽せざるべからざるものであつたようでございます、特に詩を作ります詩人、今日で申す文学者と云うような者にありましては、之は必ず小説と云う物に抛りまして、それから己れの作ります処の詩と申すものゝ種々面白い起源、不思議なる思想を探求涵養したるものであります、即ち其の基く処は小説的作用から出て居るのでございます、凡そ社会の事物を詩化致しまして之を援用しましてからに、己れの一大篇を形作らんとしますには、所謂小説的の趣味を援用するに非ざれば之を詩化する事は出来ないものであります、それで先づ一言以て之を蔽えば、他の学に於いては或は小説なるものは然のみ必要を見ないかも知れませぬが、詩を修めます上に當つては実に小説と申すものは無上の宝庫である、此の宝庫に抛りまして詩人が己の奇思妙想を養い得るものであるかと、自分は考えますのであります、<sup>(26)</sup>

ちなみに森は同書において、例えば屈原の「離騷」を「局面の大なるもの」とし、「一向歴史などにも見えて居りませんし、又経書にも出て居りませぬ処の不思議極まる物語をもつて参りまして、それでもつて己れの有為なる詩想を養いましたのでございます。それで支那に於きましては、自分一人の考えを以て作り出すのは全く小説的作用であると云つて宜敷かろうと思ひます、……小説と申すものも、詩人が韻文を修めます余業と致しまして、ヤハリ歴史的に之が研究を致して置かねばならぬものであろうかと思ひます」と述べている。森の鑑識眼は既述の「離

騷」―『楚辞』の配置問題と考え併せても明晰なものであり、また以上の陳述自体も論説としては興味深い。とはいへ「小説的」であること」と「小説」に依拠したに違いないこと」との間には無限の懸隔があるのだ。口頭講演の草稿であることを割り引いても、「一言以て之を蔽」う結論部分はただの飛躍というほかない。この論理飛躍は、明らかに結論の先在によつてゐる。「小説」が「奇思妙想」―ポエジーを養う―漢詩人森のこの発想は近代ロマン主義に浴していなければあり得ないものだ。ちなみにポエジーに関する前近代中国人の発想はといえば、むろん何らかの徳目（例えば溫柔敦厚）こそが詩想の拠つて立つ所以であり、でなければ詩作など正統な学問の余技にすぎないと位置づけるのが、社会的に主流、当然な理屈とされてきたのである―詩作が士大夫の必須教養と化し、娯楽として俗文学が発生する唐宋以降、特に―。そして作詩の内実が本当にそうだったかは保留するとしても、このような批評それ自体は明らかに実作者たちにも共有されていた。いずれにせよ森が発しているロマン主義とは歴史的にも実体的にも明らかに無縁なのである。

塩谷の先学には、以上のような奇妙な飛躍や倒錯がそのまま保持されていた。この倒錯をいかにして落ち着かせるか。それがあつた意味で古城や笹川の〈次世代〉に所属する、明治一一年生まれの塩谷に割り振られた役割でもあつたといえよう。大正八年夏期講演の時点では塩谷は何らの新発見をも未だ為してはいない。故にこの講演において世間にはいわばインパクトを与えうるかどうかは、既に先学が幾人も存在する当時において、取り立てて言うほどの業績もなかつた塩谷にとつては、おそらく真剣に考えざるをえないことだったはずである。限りある時間と余裕の中で、この講演において学者として後々やつていくための地歩固めができるかどうか、それこそまさに象徴資本を獲得できるかどうかは、彼にとつて深刻な問題だったと思う。「旧態依然の漢文学ではすまされず」という危機感は、彼の所属する研究学界のものであり、彼の家が受け継いできた「旧態依然の漢文学」のものであり、何よりも彼の家と彼自身の将来にも関わることであつた。この身に差し迫つた危機感において編み出した工夫が、「横に文学の性質種類を

説明」する「支那文学概論」だったと考えてよいのではないだろうか。そして結果、塩谷の試みは現実の世間的評価において見事に報いられた。その功績は当時のみに止まるものではない。「概論講話」を今日読んで驚くのは、現時点における本書の、むしろインパクトの無さである。戦前支那学の教科書を読むときに与えられるような、違和感を交えた驚きや創見をこの本に期待すると、間違いなく肩透かしを食らわされることになると思う。しかしそれは逆にいえば、我々の研究環境がほぼ完全に百年後の今なお『概論講話』の手の内にあるということであつて、この点こそ真に驚きを致すべきなのである。

### 三一三 植民地主義をめぐって

### 三一三一 中国語について

### 三一三一― 音読の（正当性）

以上、中国文学研究史上における『概論講話』の位置づけということに沿つて考えうる要点をいくつか述べてきた。その上で最後に、駆け足は承知のうえで、ある事柄を若干示唆的に止まるながらも挙げておきたい。

ことを「言語文字」の問題に始める。例えば塩谷とともに「国訳漢文大成」収録の戯曲翻訳に力を尽くした宮原民平は『支那小説戯曲史概説』（一九二五）序文で次のようにいう。

久しく我が読書界から閑却せられていた支那の小説戯曲が、近時頓に異常の注意を払われるようになったことは、文藝のため慶賀に勝えない所である、ただ現今に於て、一般の人は、支那文の原書を読む力に乏しいので、多くは翻訳によつてその欲求を充たそうとしてゐる、これは蓋し已むを得ないことであらう、中には漢文訓読の法に倣つて、支那口語体の文章を読み、自ら以つて意を得たりとしている者もあるが、原文の真趣を捉むことのできない点は、翻訳文を読むのと大した相違はない、畢竟支那文は支那音で棒読しなければ徹底しないのである、

然し我国では、専門の研究家すら支那音で棒読することができず、その為に、重大な誤謬に陥っている人さえある程だから、一般の人に対して、棒読は無理な注文である。……

このように「支那文」を「支那語」で読むことを最も強く主張した一人が倉石武四郎であったことはよく知られている。彼はすでに戦前の昭和一六年（一九四二）に『支那語教育の理論と実際』（岩波書店）でその見解を激烈に述べているが、同書発表の二年前、昭和一四年（一九三九）に京大教授のまま東大の講師を兼任（翌年教授併任）していた倉石は、訓読翻訳の「国訳漢文大成」を東大支那文の研究室から追い出して別置してしまつたという（そのまゝ現在に至る）。この点で倉石は塩谷を含む上の世代についてかなり手厳しく批判的だつたのだが、では当の塩谷はいつたいどのよう<sup>(27)</sup>に考えていたのだろうか。

次の陳述は、対象が（詩）に限つてのこととはいえ、いささか興味深いものである。よく知られているように、元明清以降の作詩音韻は、金・南宋において整理された一〇六韻、いわゆる平水韻を用いるのが普通である。従つてそれは当然唐詩を読むにおいては不適當な部分が多い。また明清から近現代において作られた詩の音韻は、各々それぞれ<sup>(28)</sup>の現代の現行音と一致してゐたとは限らない。この種の問題について塩谷は次のように述べている。

それよりも今日詩を作るに宋韻を奉ずるはなおおかしな話であります。せつかく平水韻の四声で作つても、これを今の音で読んでは平仄が違いますから、實際歌つても調子が合わないのは当然のことであります。

さればといつて洪武正韻のごときも、当時にあつてはすで行われなかつたのでありますから、今更現行音で詩を作るわけにもゆかず、實際今日では、作詩は唐宋の古文学としてその典型を奉ずるに過ぎませぬ。されば、我々が詩を学ぶと同じこと、支那人も韻書を検べなければ詩を作ることができないのであります。それでいて現行音で唐詩を讀んで、李太白の詩は調子がいいなどというのはどういふものでありましようか。まして吾人が訓読をして詩の格調を論ずるは沙汰の限りであります。<sup>(28)</sup>

この陳述は一読した限りでは訳が分からない。「現行音で唐詩を読んで、李太白の詩は調子がいいなどというのはどういふものでありましょうか。まして吾人が訓読をして詩の格調を論ずるは沙汰の限りであります」という塩谷は、「格調を論ずる」においていつたい「現行音」で読むことを正しいと考えているのか、それとも「訓読」で読むことを正しいと考えていたのか？。

現行音も訓読も、我々も支那人も「同じこと」というくだりに注意しつつ、まず議論の前提を少し詰めておこう。純粹に言語そのものにまつわる問題を整理すれば、その限りでは宮原も倉石も単に間違っている。(訓読)や(翻訳文)と、(支那音)との間に、「原文の真趣」をも含めて正しい解説という見地からの優劣などはない。そもそも(音読)もまた書記言語に対しての歴とした「翻訳」である。そして研究の対象がたとえ音韻学であろうと、書かれたテキストを基礎にして研究するかぎり、そのとき研究者はいわば(書かれた音韻)を相手にしているにすぎない。この言語の問題については例えば酒井直樹は、吉川幸次郎「仁齋・徂徠・宣長」(一九七五)に即して「この論文集には荻生の言語学習問題意識に関する優れた記述がある」としつつも、次のように指摘する。

しかし吉川は、音声的読みのほうが和訓より優れているという立場をとっている。さらに、荻生の中国口語に関する意見を超歴史的に正しいものとして受け入れてしまっている。しかし、超歴史的に正しいあるいは間違った読み方などというものはないのであって、……読みの異なった実践系があるだけなのだ。中国語の読みに関するこうした見解が中国研究の学問・職業的な特権擁護のための信仰告白として機能してしまうことに吉川は気がついていないようである。十八世紀以前、「中国語を話す能力」などという語句は、どの中国語のことを言っているのか予めはつきりさせないかぎり、何の意味も持たなかった。そもそも「中国語」とは何なのか。紀元前六世紀の「フランス語」等というのとそれはどれだけ違うのか。<sup>(29)</sup>

酒井のこの指摘には、中国学の研究されてきた環境について良くも悪くもあまり配慮がない。それだけにむしろ専

門家の反省すべき点が指摘されているともいえようが、ともあれ酒井のいうとおり、前近代において単に「中国語」というだけでは、それが「どの中国語」を意味するのには全く不明である。「中国語」という概念をもたらす學術分野に近代言語学においては、言語の本体は文字である以前にまず音だからであり——いわゆる音声中心主義——、この考えに基づけば、〈上海語〉〈廣東語〉、そして何よりも〈北京語〉は「中国語」の一言では片の付かない異言語だからだ。むろん倉石のような主張が出現すること自体は、歴史上のいわば避けえない、かつ必要なステップであり、この種の問題を解読の側面にのみ限って考えることは当を失するものである。(30) だがともかく「中国語で読むことが正しいか否か」という議論は、言語機能上の問題に限って論じる範囲では不毛であるに過ぎない。恐らく塩谷は言語の問題を倉石や宮原のように捉えていない。しかしでは「訓読でも現行音でも同じことだ」という塩谷の発言はどのように考えればよいのか。

### 三—三—一—二 音声言語と書記言語

明治期の東大における中国語学は、言語学としての中国語の研究ではなく、実践語学の教授をこそ意味するものであった(31)。在学時に一応基礎は身につけていたと思しい塩谷が、本格的に中国語を学んだのはドイツ留学の後の清国留学の時点であつたらしい(ドイツ留学時に機会を得てイギリスにジャイルズを訪ねた際、相手から開口一番「ニンホエ シュオチョンクオファマ——您会说中国話麼——」とやられて「中国語は出来ませぬ」と応答した(32))。しかし北京語を習う以外にすることもなく、「北京」は「学問の地」ではないと思つていた塩谷は、折から出会つた真宗僧の水野梅暁(一八七七一—一九四九)によつて湖南——清代を通して、ことに清末の人文學術振興に力あつた地域——へ行くことを薦められる。仏僧として活躍すると同時に「支那時報」(大正一三—一九二四)年創刊)等を発行したジャーナリストとして有名な水野は、布教・広報活動の拠点であつた湖南に多くの知人を持つていたのである。その彼の紹介に

よつて塩谷に引き合わされたのが、戯曲に關して終生塩谷の恩師となる大学者、葉德輝であつた。

私に支那戯曲の手繻きをして下されたのは森槐南先生であり、研究を大成せしめられたのは、葉德輝先生と王国維君であつた。而して御兩人とも國変に横死されたのは不思議であり、痛恨に勝えない。初め私は那珂先生に従つて元朝秘史を読み、蒙古語の片鱗を知り、槐南先生より西廂記の講義を承つて元曲の啓蒙を受けた。ドイツ留学中に英のチャイルズ及び独のグルーベの支那文学史を読んで、西洋学者の研究が戯曲小説に重きを置けるを知つた。北京に留学中、主として中国語を習い、長沙に転じて葉德輝先生に従い、元曲西廂と琵琶、明曲牡丹亭と燕子箋、清曲長生殿と桃花扇を学び、王君の曲録（北京で親しく贈られた）及び宋元戯曲史を参考して学位論文『元曲之研究』を完成した。<sup>34</sup>

葉德輝（清同治三（一八六四）—民国一六（一九二七）、字は煥（奂）彬、号郎園（けいえん）。湖南湘潭の人。光緒一八年（一八九二）第二甲出身の進士である。登科後いつたんは吏部主事の職に就きはしたものの、間もなく致仕した葉德輝は、郷里湖南に引きこもつて学究生活を送つていた。王闈運（一八三一—一九二六）、王先謙（一八四二—一九一七）に並ぶ清末湖南出身の大学者、蔵書家でもあつたこの人物の関心は、經史子から道・仏、小説戯曲に至るまで分け隔てなく及んでおり、この種の雅量に富んだ人物なればこそ異国人の塩谷に「曲学」を熱心に教え込みもしたのだろうが、その葉の今なお知る人ぞ知る最大のスキヤンダルは、いうまでもなく『双椽景閣叢書』の刊行（清光緒二九（一九〇三））である。中国において早く散逸した、隋唐までの房中術書籍『素女經』『玉房秘訣』『洞玄子』などを日本平安期の医書『医心方』養生項目から再生し、さらに伝唐白行簡撰『天地陰陽交歡大楽賦』などを添付収録した当叢書の刊行は喧々囂々非難を呼び起こし、葉の学者生命を断たんばかりの騒ぎとなる——後に本当に彼の命を断つ遠因となつたともいう——。

ともあれ塩谷の遊学は葉德輝の膝下にその居場所を得た——なお塩谷の湖南滞在が折から武昌蜂起（一九一一）に



始まる辛亥革命の真つ直中であつたことはいうまでもない。そのかみの受業光景についての塩谷の次のような回想は、葉德輝の授業が明らかに主として筆談で行われていたことを示している。

業を受けるといつても学校の聴講のようなわけにはゆかない。先生に取つては最も迷惑なのであるから、なるべく邪魔にならぬよう、都合を伺つて、候し、予め検べて書き取つた質問の章句を示して、疑を質するのであるが、先生は少しも嫌な顔をなされず、筆を墨壺に浸して、蠅頭の細字を綿々と書き下し、忽ち教行に及び、参考書をあちらこちら探されることはあつても、行き詰つて筆を投ぜられたことはなかつた。冬の寒い日は筆持つ指頭が凍り、夏の暑い時は汗が紙上に滴り、御苦勞の段、恐縮千万であつたが、先生は熱心に教えを垂れられた。<sup>(35)</sup>

葉德輝の京官＝中央官僚生活は短期間にすぎなかつた。引退後はほとんど郷里で学究生活を送つていた彼が、塩谷の学んだ「中国語」＝北京官話をどの程度操れたかは、いささか怪しいといわねばならない。一方、北京語を習い覚えてようやく旬日を経たに過ぎない塩谷に湖南語までどうこうする余裕などあつたわけがない。「明治の初期に、榑原陳成氏の兪曲園に杭州に従い、宮島大八氏の張濂亭に武昌に従つた当時の遊学は、全く中国人同様の入門であつたが、中期以後の服部、狩野両博士等の北京留学は、見学に過ぎなかつた。私は湖南に遊んだ為に、幸いに湘儒の風貌に接し、古風を見習うことが出来た。両王先生（王蘭運と王先謙：引用者注）の如きは、私を遇するに晁衡（阿倍仲麿）以来の旧誼を以てし、懇々として教を垂れられたのであるが、こちらが湖南語に通ぜず十分に奉教の用意がなかつたことが遺憾であつた」<sup>(36)</sup>（傍点引用者）。ことに微妙なニュアンスの説明に分け入つた場合など、進士の葉德輝と漢学伝家の塩谷との間では、怪しげな、でなければ覺えたての北京語を使つてなどよりも、筆記——恐らくは俗語混じりの文語体——のほうが、はるかに適切、正確な伝達手段として機能したはずである。初歩的な応答を除いて、口頭による意志疎通が両者間にほとんど無かつたとしてもさして不思議ではない。

戯曲研究におけるもうひとりの恩人、王国維（清光緒三（一八七七）—民国二六（一九二七））について塩谷は「王国

維君と初めて逢つたのは、年代ははつきりしないが、北京であり、その時に同君から「戯曲考源」と「曲録」とをもらつて非常に重宝し、その博識に敬服した。同君は浙江寧波辺の人で、方言の訛りがひどいので、とても会話は出来なかつた<sup>(37)</sup>（傍点引用者）と述べる。それでも王国維の「博識に敬服する」のに何の障りもなかつたのである。訓読だろうが現行音だろうが詩の真趣などつかめるわけもないと言つた塩谷は、まさに自らが戯曲の「真趣」を会得したその実体験において、音声言語を通ぜずとも〈真理〉は伝わり得るという事実を感じていたのだと考えてよいだろう。ちなみに竹田復（一八九一—）は塩谷の授業について「入学の年には、桃花扇のお講義があり、難読の俗語を巧みに訓読された。……この俗語の読み方は、二年になつて宇野先生の東塾讀書記の演習に、大いに役立つた<sup>(38)</sup>」（傍点引用者）と述べている（俗語文を書き下した「国訳漢文大成」の実例をここで思い起こすことができよう）。

「訓読」漢文の活用はむろん学問の場にのみ特化された現象だつたわけではない。「日本には支那通の外交官も多数あつたが、自身中国語に通じた人はなくみんな通弁外交であり、而も漢文の出来る人も少なかつた。日支外交の不振もこゝに起因する<sup>(39)</sup>」と後年述べた塩谷は、「漢文」が「中国語」の代理として、筆談がコミュニケーションの手段として有効に機能していた時期に生きていたのである。この時期の日本において中国語教育の普及などはおよそ話にならなかつた。しかし同時に一方で、この時代にはその欠陥を補うだけの漢文駆使能力の保持者が少なからず存在しており、かつ「漢文」で「支那人」とコミュニケーションを取ることは、今なお残る一九世紀後半のいわゆる筆談資料の類を例に挙げるまでもなく、中国人サイドからも珍しくない時期だったのである。以上を乱暴に総括すれば、意思伝達の（正当な）手段が、書記言語の媒介から音声言語の媒介へと切り替わる、その〈過渡期〉であつたことが、塩谷に言語に関する適切な認識を結果として与えたのだといつてよいだろう。この結果塩谷が保持していた知覚は、過渡期後の（そして以前の）人間が持つた認識、常識とは様相を異にしていたのである。

## 三三二 特権化された視線

この〈過渡期〉には、避けて通れないもう一つの側面がある。このもう一つの側面が、特に塩谷においていかなる意味を持ったのかを最後に見ておきたいと思う。俗文学開拓における塩谷の業績は大正期から昭和二桁代、つまり一九一〇—一九二〇年代に集中している。これ以降死去するまでの三〇有余年、塩谷は『国訳元曲選／元曲概説・漢宮秋・殺狗勸夫』（一九四〇）や戦後の『西廂記』訳などを除いて、俗文学関係では目立った仕事をしていない。それはもはや「過渡期」が終わりつつあったからだと見ることもできるが、これより後の彼の作業は、むしろ新生面とは別種の〈反動〉的な側面を色濃く帯びるようになる。『唐詩三百首新釈』（一九二九）、『孝経新釈』（一九二九）、『興国詩選皇朝篇』（一九三二）、『王道は東より』（一九三四）、『詩経講話』（一九三五）、『頼山陽と日本精神』（一九三六）、『漢詩と日本精神』（一九三八）、『大東亜戦役詩史』（一九四四）——彼の述作目録から適当に抜き出しただけの以上を一覧するだけでも分かるとおおり、その後半生は伝家の漢学者でなければ露骨な右傾イデオログとして生きることには費やされたのである。

かくして特に後年「新生の共和国中華民国を圧殺する日本軍国主義の宣伝を努め」た塩谷の、最も弁護のしようもない行動をひとつ挙げれば、退官七年前の昭和七年（一九三二）から翌八年（一九三三）一月三日に帰朝するまでの、政府命令による「欧米各国」への「出張」であろう。折から進行中だった満州国建国（一九三二年三月一日建国宣言）——その護持と擁護のために塩谷は欧米各国を周遊演説、正当性を宣伝広告して回ったのである。帰国直前に正四位、その後勲二等授瑞宝章、従三位、ついで特旨により正三位に叙せられ、退官後は東京帝国大学名誉教授の称を授けられて功成り名遂げたこの時期は、彼にとつての人生の、もう一つの最盛期でもあったと思しい。しかしこの種の〈競争責任〉をここで論ずるのは控えるとして、日本人としての塩谷が中国語で書かれた中国文学について権威的に語る——ということの問題を考えておきたい。ここで井上哲治郎の古城『支那文学史』序文の一部を改めてひいてみよう。

唯だ支那文学は西洋人の未だ大に研究せざる区域に属す、詩経の外、李白及び白樂天、蘇東坡等の詩は多少彼國に訳出せられたるも、古今三千年の文学を歴史的に考察するが如き、豈に彼等が容易に企圖し得る所ならんや、然れども支那人自らは元來概括力に乏しく、且つ今の學術界の状態如何を弁せざるが故に、支那文学史を著わすの必要を知らず、仮令い之れを知るも、之れに應ずるの資格なきものなり、果して然らば支那文学史を著わすが如きは、我邦人自ら進んで此任に当らざるべからざるあり、<sup>(41)</sup>

引用者が傍点を付した部分など殊に凄まじい。むろん井上のこのような発言は日清戦争（明治二七（一八九四）年）後なればこそであった。井上はもはや躊躇せず中国を（見下げる）ことができる時期の人間だったのである。植民地学としての東洋学、たとえばイギリスにおけるインド研究、フランスにおけるベトナム研究といった學術の定義と性質とは、日本人（支那—中国）学者の視線にも当てはまる部分が多い——むろん日本型の植民地支配は欧米のそれ、つまり差異を創出・支配する構造に支えられたオリエンタリズムでは説明しにくい理屈、「同化」原理を主軸として、短絡して述べることはできないが<sup>(42)</sup>。ともあれいかなる普遍性、価値理念よりも（国境）こそが優先して存在するというネーション・ステート以降の自意識<sup>(43)</sup>（「国民」意識以降において、このような植民地主義<sup>(44)</sup>（日本が他国の中国について優位的に語ることを可能とした要件が何なのか）に配慮しつつ、研究に関する塩谷の認識について考えてみよう。次なるは戦後新版『支那文学概論』の昭和二一年三月付序文である。

明治以後は文化交流の跡全く逆転し、我が欧米より撰取して大成せる新文化は盛に清國に輸入せられて、遂に中華民國の革命を見るに至れり。所謂文学革命における白話文の提唱の如きも我が言文一致体に刺激せられしことと少からず、注音字母は要するに仮名の応用なりと謂うべし。……惟うに日支文化交流の跡を詳にして、両国親善の実を挙げ、以て優秀る東洋文化の真髓を發揮して世界平和の確立完成に寄与せんこと、豈東洋の将来を双肩に担える新進学徒の大使命に非ずや。

この絶対的な——欠片も反省のない——塩谷の自信には、しかし井上や、あるいは例えば「文学史は支那よりも日本で先に着手したので、支那人の著には日本人の書に倣うたものが多い」（青木正児『支那文学概説』）などと述べた専門家青木とでも決定的に違う、重要な根拠がある。塩谷には絶対的な自信を持つべき具体的かつ正当な理由があったのだ。

塩谷の生涯の恩人、葉德輝と王国維は同じ民国一六年（一九二七）に「御両人とも国変に横死」している。当時清華学校国学研究院の教授であった王国維は同年六月二日、遺書を残して北京頤和園の昆明湖で入水自殺した。民国一三年（一九二四）一月の有名な宣統帝紫禁城追放——クリスチャン・ジェネラルこと馮玉祥が、辛亥革命時の民国との契約を反故にしてそのまま紫禁城に住まっていた前清廢帝溥儀を放逐——に憤つての殉国であると、通説は一応伝えている。

一方葉德輝の方は遙かに悲惨であつた。折から前年来の蒋介石率いる国民革命軍北伐の嵐の中、伝えられるところでは農民協会に対して「農運宏開、稻梁菽、麥黍稷、尽皆雜種。会场広闊、馬牛羊、鶏犬豕、都是畜牲」などと要らぬ口をたたき、かねてより言動を周囲から睨まれていた葉德輝は、王国維に先立つて四月一日、革命に楯突く不良ジェントリとして問答無用で捕殺された<sup>(44)</sup>——ちなみに一説では彼に被せられた罪名の一つは荒淫靡爛の四字であつたという。やはり『双椽景闇叢書』一件が引つかかつていたとみてよいだろう。

葉德輝の惨死について塩谷は次のようにいう。

先生は曾て辛亥革命の際、悪口家の章炳麟が「湖南不可殺葉某、殺之則読書種子絶矣」と言つたと云われたのに、中華民國はどうして斯の人を殺したであろうか。天はどうしてこの国宝的文化財の老儒を庇護しなかつたであろうか。天に慟し、地に哭して、言う所を知らない。私が避難を御勧めすれば、先生は二人で戦禍の及ばない所で書を読もう」と言われたり、又時には、「我が蔵書は貴国に持運び、大学で講義をしよう」といい、遂に

は失望して「我が子孫は貴国の籍に入るべし」と嘆息されたこともあった。<sup>(45)</sup>

塩谷の回想であることを割り引いても、おそらく葉德輝が似たようなことを実際に口にした可能性は高い。中国人にとつても〈過渡期〉であつたこの時期において、本国にある限りは最早その志が達成されえないならば、海を渡つて〈言葉〉＝漢文の通じる海東の強国日本に行こう——清末民国期の中国人にとつて、これはあり得ない選択肢ではなかつた。塩谷が博士論文「元曲之研究」（漢文である）を見せたところ、自分の教授の成果に喜んだ葉德輝は序文を二つも作つた上「吾道東矣」——わたしの「道」は「東」へ伝わつた／受け継がれた——と激賞したといふ。<sup>(46)</sup>

漢学者にとつて様々なニュアンスのある「東」——この言葉が近現代の地政学的要件と結びついたとき、そこにはある一つの結果が生じることとなる。葉王兩人の死を「学界の二大不幸として、史上における秦時の焚書坑儒と屈原の入水とを目のあたり見る心地がして、歴史を見返えす氣になつた」<sup>(47)</sup>塩谷にとつて、支那文学の要所たる戯曲小説、そしてそれによつて支えられる〈国民文学〉を構築する資格と能力があるのは、二人の教えを受け継いだ自分しかない。二人とも非業に死んだ今、その二人の研究を承継して〈支那人〉に〈支那文学〉を与えてやれるのはこの世に〈東＝日本〉の塩谷温しかない。葉先生も生前まさにこう仰せられていたではないか、「我が子孫は貴国の籍に入るべし」と——彼の自信の源泉はここに存していたのである。

その行動が、結果として後世の人間の単純に肯いかねるような種類のものに終わつたとはいへ、彼の持つた自信には、自らの能力と経験と実績とに基づく客観的な裏付けがあつたのだ。塩谷の『概論講話』やそのテキスト発掘の業績は中国本土の斯界において広く知られた。ことに魯迅（一八八一—一九三六）の古典研究に深く影響を与えたことは、同人の『中国小説史略』（初刊 一九三三）の自序（一九三〇年一月二五日夜付）や、その『小説史略』を『概論講話』の剽窃と非難されたときの応酬などを通じてよく知られているが、そうやって塩谷の名を認知する機会が多かつた魯迅は同じ一九二〇年代以降、当の節山子と直に親交を持つに至つた。「抑三百篇變じて屈宋の辞賦となり……」

降りて現代の白話文学となる」——先に挙げた一九二九年刊・沢田総清『支那韻文史』塩谷序文——、その「白話文学」の旗手までが、三顧の礼でもって「支那文学」を問うて自らを訪れているではないか。塩谷が「三言」の発掘を報告したのは大正一五年（一九二六）<sup>(48)</sup>、すなわち『概論講話』発表後七、八年を経てのことである。翌年、葉德輝と王国維が非業の死を遂げた。中国の価値は日本人の研究を通じてこそ初めて顕現するという認識は、塩谷の心理においては数年後の〈業績〉によつて実体的に裏付けられ、それに次ぐ葉・王両人の死によつて、いわば義務感、使命感とも変じたのではないだろうか。「道」は確実に東遷した。それよりさらにもう数年を経たのち、日本人の手を借りて五族が建設する王道楽土、満州国を塩谷が弁護して回つたというのは、おそらくは、偶然でも勘違いでもない。彼ら〈支那人〉に、〈支那人〉として持つべきものを、自分が与えてやらねばならない。自分こそそれを口にする資格がある——何よりこの自覚において彼は確信犯だつたといえよう。

魯迅は一九二五年四月二五日付でこんなことを書いている。

しかし、中国固有の文明を賛美する人はふえつつある。中国人ばかりでなく、外国人もふくめて。私はよく思う。もし中国へ来訪する外国人で、むしうが走るほど中国が嫌いだ、と言う人がいたら、私は心からの感謝をその人に捧げたい。なぜなら、その人はきつと中国人を餌食にはしないだろうから。<sup>(49)</sup>

彼はいつたい、塩谷と塩谷の研究とにどの程度の無垢さを信じていられたのだろうか。「人食いの一味」とはむろん、この種の逆説を生み出す現実の構造、帝国主義的搾取に無関心なまま、善良に「中国」を「賛美」しつづけた人種のことには他ならないからだ。そしてその際彼らに供せられたのは、何も金銭財貨や政治的特権などにのみ止まるわけではない。たとえばスタインが敦煌から文物を持ち出したとき、彼はその文物の価値を金銭的代価に見ていたりしただろうか？。人は往々にして彼が文物を持ち出したことをこそ責める。だがある意味で文物のある場所が東だろうが西だろうがさしたる問題ではない。スタインは文物を持ち出したとき、同時にもつと大切な別のものをも共に持

ち出したのだ。(「東洋学」を含めて近代的諸学問とその配置は、植民地主義に支えられた無形物Ⅱ象徴資本の搾取によつてこそ初めて成立したのであり、そしてそこでは何よりも古典研究こそが現在現実の環境と深くコミットしていたのである。

以下、我々は話題を、たとえば中国本土における古典研究の問題——それが帝国主義的侵略として機能してしまつたことを彼ら自身がどう捉えるか——に発展させることもできるけれど、これはもとより小論のよく追跡しうる範囲ではない。最後に塩谷の晩年について一つだけ付け加えるに止めておく。戦後不如意の生活を強いられつつも、国体と道徳の再興を叫んで意気軒昂に過ごしていた塩谷は、古希を迎えて三十才半ばの花柳界出身の相手・長谷川菊乃(晩香)と再婚した。当時世に知られた二年足らずの「老いらくの恋」のち昭和二六年(一九五二)七月、この菊乃が謎の死を遂げ、それが(「老漢学者の若夫人自殺」と興味本位に騒がれて事件がスキャンダル化したとき、(「自殺と決めつける世人」への反論として塩谷が書き散らした手記のひとつ「宿命——晩香の死について——」(「週間朝日」一九五一年八月二日号)を読んだ坂口安吾(一九〇六—一九五五)は、そこに示されたあまりにアナクロな愛情表現に反発し、『安吾人生案内／暗い哉東洋よ』<sup>(50)</sup>のなかで塩谷を厳しく論難した。

その文章を坂口はこのように締めくくっている。「人間の倫理は己が罪というところから始まつたし、そうでなければならんもんだが、東洋の学問は王様の弁護のために論理が始まつたようなもんだから、分らんのは仕方がないが。ああ暗い哉。東洋よ。暗夜、いずこへ行くか。オレは同行したくないよ」。

(1) 内田泉之助「節山先生と斯文会」末尾に斯文誌上の論説講演等題目、著述目録を掲載。

(2) 『東大百年史／部局史一』七三二頁



(3) 明治末から大正期には『国訳漢文大成』四〇冊(国民文庫刊行会一九二二以降刊行のち『資治通鑑』等を含む『統国訳漢文大成』も発刊)、『漢文大系』二二冊(富山房一九〇九—一九一六刊行)、『先哲遺書』漢籍国字解全書四五冊(早稲田大学出版会一九〇九—一九一七刊行)、『漢文叢書』四〇冊(有朋堂一九一九—一九二五刊行)といった中国関係の叢書類が相次いで発刊されている。これらに戦後の明治書院刊『漢文大系』、平凡社『中国古典文学全集』三六卷、同『中国古典文学大系』六〇巻などを加えて比較すると様々な事情を考へることが出来る。たとえば成立時期——戦前群の発刊時期はいわゆる大正教養主義の時期とも一致し、戦後後者群は、やはり教養主義が最盛期をむかえ、かつ下降し始める直前の七〇年代頃に発刊されている。あるいは編集スタンスの異同——前者群においては『漢籍国字解全書』が日本人漢籍注釈の大成、『漢文叢書』が『日本外史』等の日本人著(漢籍)を含んで、かつ両者とも經史子と詩文集のみを収録範囲とするのに対し、『国訳漢文大成』は名は『漢文』といひながら經史子部二〇冊と(戯曲小説)が半分方を占める文学部二〇冊とから成つて、かつ日本漢文を全く含まない。あるいは——平凡社『文学全集/大系』は明治書院『漢文大系』と正反対に、全冊徹底して漢文書き下しの素養を排して成立している——などといったことである。

(4) 『西廂記』『還魂記』『漢宮秋』等は後にも名前の挙がる宮原民平(一八八四—?)訳である。また『紅樓夢』訳が幸田露伴(一八六七—一九四七)等の手になることは名高い。なお塩谷は晩年『西廂記』にも手を加えている(『西廂記』(訳本) 昌平公司一九四七、『歌訳西廂記』養徳社一九五八)。

(5) 正確には一九四六年六月に上編、一九四七年八月に下編を發行。これとは別に、四七年一〇月に上下合本の限定版が出版され、一九五二年に訂正再版發行。以上刊本の問題に関しては『支那学報/九号』所載の内田泉之助「節山先生の文学史研究について」、辛島驍「先生の小説研究」が詳細。

(6) 同社は、この本を復刊するにあつて題名から本文まで「支那」の表記を、序文を除き全て「中国」と更めているが、その更改については何一つ断りを入れていない。

(7) これらの授業と平行して、塩谷は「(漢文)演習及作文」という名称の講義をも担当している。内容は「四書素読」、「唐詩三百首講義」、「論孟素読」、「古詩源講読」といった、つまり四書か漢詩集の講読である。『東京大学百年史』は老師星野恒に戯曲研究への偏重を叱責されたことよつてか——後に詳しく言及するが——、塩谷の講義目録には「支那戯曲講読」とならんで四書の素読が星野死去の大正七年(正確には大正七年九月—八年七月の講義まで・引用者注)まで引続いて見られる」と指摘してい

る(部局史一七三三頁)。

- (8) 倉石「学位論文と戯曲研究」／『支那学報九号』所収
- (9) 小野「塩谷先生の学問の西洋的方法」／『支那学報九号』所収。なお一七世紀後半時点で、ドイツには既に種々の中国語辞典が作成所蔵されていたという。例えばヘルベルト・フランケ述、ヴィルフリート・シュルテ訳「ドイツ支那学の歴史」／『東京支那学報 第一号』(一九六五) 所収参照。
- (10) 塩谷はこの両冊に比較的大きな影響を受けている形跡がある。グルーベについては自身「ドイツ留学中に英のチャイルズ及び独のグルーベの支那文学史を読んで」(『天馬行空』九一頁)といひ、またガベレンツ「中国語文法」(Chinesische Grammatik mit Ausschluss des niedern Stils und der heutigen Umgangssprache)については、他ならぬ『概論講話』第一章冒頭に『漢文経緯』としてその名を挙げてゐる。グルーベ(Grubbe, Wilhelm/一八五五—一九〇八)は女真語研究者としても著名。ガベレンツ(Gabelentz, Hans Georg Conon von der/一八四〇—一八九三)は政治家でもあつた父親以来、親子二代の東洋語学研究者として名高い。
- (11) 倉石「中国文学史」(中央公論社 一九五六) はしがき。なお日本人著の中国文学史は、三浦叶「明治年間に於ける支那文学史の研究」(『斯文』第三七号 一九六三)によれば末松謙澄(一八五五—一九二〇)の『支那文学略史』(明治十五年(一八八二)刊が嚆矢というが、その内容は「支那古文学」＝「先秦以前ノ文学」に限られており、しかも「先秦の文学を時代順に簡単に解題したものであつて、名は文学史であるが、学術史」(三浦)であるに止まる。ただしその冒頭に「支那古文学ノ東洋文学ニ必要ナルハ、猶希臘羅甸学ノ西洋文学ニ於ケルガ如シ、之ニアラサレバ以テ文化ノ淵源ヲ極ムルニ足ラズ」と、位置付けにおいてワールドワイドな構想を持っていることには注目できよう。なお三浦の指摘するところ本書は三上参次『日本文学史』(一九九〇)より早い。ちなみに古城は三上の体裁に倣つて『支那文学史』を書こうと思つたといつてゐる(自序)。
- (12) 正確には歴史学ジャンルはこれより七年前の明治三〇年(一八九七)、漢学科中の「史料」として実質的に独立している。
- (13) 『概論講話』(第二章 文体/第二節 辞賦類/第一項 楚辞)の項。傍点引用者。
- (14) 狩野直喜「支那小説史」(第一章 総論)。「支那小説戯曲史」(みすず書房 一九九二)所収。本書は大正五年(一九二六)九月から六年六月間での講義原稿から近年起こしたものと、狩野直禎の解題にいう。
- (15) 倉石「学位論文と戯曲研究」
- (16) 塩谷「天馬行空」「星野豊城先生」の項

- (17) 文中にも名前の挙がる清末の大学者王先謙も「経史の研究をすべきよう説諭せられた」と塩谷は述べている。塩谷『天馬行空』「湘儒／王先謙先生」の項
- (18) 星野『史学ニ対スル世評ニ就キテ』／『史学叢説 第一集』(富山房 一九〇九) 所収
- (19) 塩谷『天馬行空』「市村器堂先生」の項
- (20) 塩谷『天馬行空』「根本通明先生」の項
- (21) 古城『支那文学史』の明治二九年九月一日付、井上哲次郎序文
- (22) 井上の古城『支那文学史』序文冒頭は、「我邦の文化は本と支那に得る所少しとせざるも、西洋の學術を引きて之れを入れるに及んで、迥に支那に駕して上るに至れり、是に於てか我邦人の支那を輕侮すること殊に甚しとなす、……事已に此の如くなる以上は支那文学の如き亦吾人研究の区域外に放逐し去りて可なるか、世の学者にして四書五経は己に腐敗せりと絶叫せるを見れば、或は之れに答えて然りと云うものもあらん」などと述べる。しかし他ならぬ井上自身一面ではこの「之れに答えて然りと云うもの」のひとりでもあった。委細はイ・ヨンスク『国語という思想』(岩波書店 一九九六) 四〇頁以下、六六頁以下などが参照しやすい。なおイの強調するところに従えば「明治期までは、それはたとえ反清意識からにせよ、漢字の全廃は多くの知識人、さらには文部官僚にまで及ぶ考え」であり、しかも同時に「皮肉なことに、脱漢字が説かれたこの明治期こそ、漢語が氾濫し、社会の隅々にまで浸透し始めた時代」でもあった(同書四六頁)。
- (23) 『支那文学史』段階で見える仏教文学関係は「第五章 唐朝の仏教文学／玄奘の講經 禅宗各派 禅家の文章、及び作例」の項目。
- (24) 沢田総清『支那韻文史』(弘道館 一九二九)の塩谷温序文、傍点引用者。
- (25) 戯曲はそれが音曲を伴った歌詞であることよって、『詩経』中の「国風」がかつてはメロデー(Ⅱ文)にのせて歌われたものだという伝承になぞらえ、古先聖王の礼楽や經典の末流とも位置づけられることがある(よくいわれる「漢文・唐詩・宋词・元曲」に類した成句の最も早く見られる例、元末「草木子」に元曲をさして「大元楽府」——漢代に世情を洞察するよすがとして民謡を収拾したといわれる役所、転じて歌曲そのものを指す——と呼ぶのも類した考え方であろう)。この点で小説よりも戯曲のほうが若干社会的地位が高いと見なされることはある——有名な例は、曲を經に列ねて配置した明・王圻の『統文獻通考』——。とはいえこういつた見解は世間的には通常異端と見なされる。

(26) 『作詩法講話』第六章「小説概要」の冒頭

(27) 『東大百年史／部局史一』七三四頁。倉石に關しても『東大百年史／部局史二』同ページ以下を参照。日本近代における中国語教育の状態については、倉石への言及をも含め例えば安藤彦太郎『中国語と近代日本』（岩波新書一九八八）の五頁以下などが状況の概観に便利。

(28) 『概論講話』（第二節 四声及び百六韻／第二項 百六韻）の項、傍点引用者。

(29) 酒井「翻訳の問題」原注（一一）／『批評空間（第一期）』一九九三No. 一一（福武書店）五四頁。／訓読と中国語音読に關する酒井の整理についての委細は四三頁以下参照／なお同論文は『Voices of the Past: Discourse on Language in Eighteenth-Century Japan』（Cornell University Press, 一九九一）第七章の著者自身による翻訳／傍点は原表記のまま

(30) いわゆる（想像の共同体）の論議を思い起こそう。すなわち近代言語学以降このようにして認定された（言語）こそが（国語）Ⅱ近代国民国家なり民族精神なりの精髓Ⅱ国家や民族を支える同一性として機能する。そうやって認定された（国語）を話すことこそが、その（共同体）の成員であることの必須条件であり、（国語）を話すという行為は、自らが（共同体）の成員であることを認め、帰屬意志を表明したことを意味する——批判反駁を含む委細はにおいて、とりあえずこの簡単な陳述で片が付く範囲に限って述べるなら、（中国語で音読することは正しい）と日本人研究者が表明するとき、そこには言語学的に正しいとする以上のニュアンス、特に政治的表明が不可避に含まれてしまうだろう。ゆえに酒井のいう「吉川」が「音声的読みのほうが優れている」という意向を含む書物を一九七五年に発刊したことが、単なる学問上の「信仰告白」だけで終わるとは限らない——。吉川の深意はともあれ、国交正常化交渉開始のこの時期、一九七二年の田中角栄訪中から一九七八年の平和友好条約締結に至るまで日本の政界は大陸派と台湾派との間で大揉めに揉めていたのである。

(31) 『東大百年史／部局史一』七二八頁以下参照。ちなみに塩谷は「私が大学で全国環先生から中国語を習ったときの教科書はトーマス、ウェードの『語言自彙集』であり、字書はチャイルズの『華英辞典』であった。……日本の中国語は外人に由つて開かれたのであった」（『天馬行空』『チャイルズ教授』の項）といっている（引用文中の「全」は「金」の誤り。金国環は張慈昉・張廷彦などと並んで外国人講師として東大初期の支那語授業を担当）。

(32) 塩谷『天馬行空』『チャイルズ教授』の項。発音表記は同書記載のルビによる。

(33) 塩谷『天馬行空』『水野梅曉和尚』の項

- (34) 塩谷『天馬行空』「葉德輝先生」の項
- (35) 塩谷『天馬行空』「葉德輝先生」の項
- (36) 塩谷『天馬行空』「湘儒」の項
- (37) 塩谷『天馬行空』「王国維君」の項
- (38) 竹田「壮年時代の節山先生」／『支那学報九号』所収
- (39) 塩谷『天馬行空』「チャイルズ教授」の項
- (40) 藤井省三「塩谷温」／『東洋学の系譜 第二集』一〇三頁
- (41) 古城『支那文学史』井上哲治郎序文
- (42) 小熊英二「(日本人)の境界 沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで」(新曜社 一九九八) 七頁以下参照
- (43) 『天馬行空』は旧曆三月一〇日で日付を取っている。
- (44) 聯句は郭廷以『中華民國史事日誌』(台北：中央研究院近代史研究所 一九七九)による。
- (45) 塩谷『天馬行空』「葉德輝先生」の項
- (46) 塩谷『天馬行空』「葉德輝先生」の項
- (47) 塩谷『天馬行空』「王国維君」の項
- (48) 「三言」については一九二六年「明代の通俗短編小説」／『改造』(改造) 八巻八号「現代支那号」所収、及び「明の小説『三言』に就て」／『斯文』(斯文会) 第八編第五号―七号(一九二六年六月二六日斯文会での講演を活字化したもの) 三回連載所収にて発表、「全相平話」については一九二八年「全相平話三國志に就きて」／『狩野教授還暦記念支那学論叢』所収にて発表
- (49) 魯迅「灯火漫筆」、訳は竹内好『魯迅文集 三』(ちくま文庫 一九九二)による。
- (50) 坂口「安吾人生案内——その六 暗い哉東洋よ」／『オール読物』一九五一年一〇月特別号に掲載／『坂口安吾全集』一一巻所収(筑摩書房 一九九八)